

## 法曹コースについて

### 新制度の概要と高等司法研究科の取組み

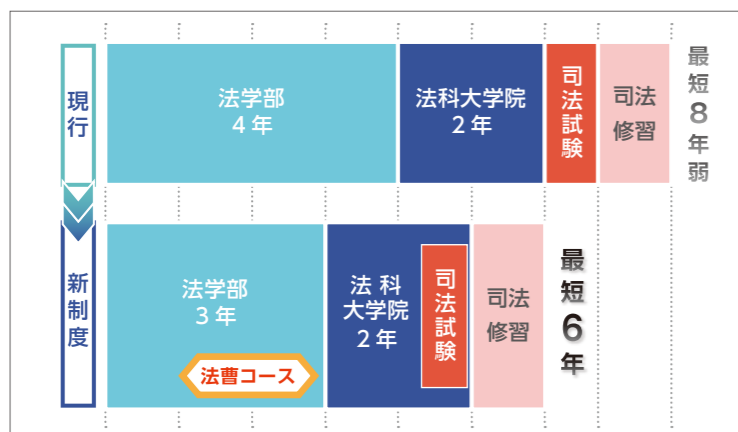
「法科大学院の教育と司法試験等との連携等に関する法律」の一部改正(2019年6月公布)により、法学部において、法科大学院における教育との円滑な接続を図るための課程(いわゆる「法曹コース」)の設置が認められることとなりました。

法曹コースには、次のような3つの特徴があります。①学部の早期卒業制度を活用し、3年で法学部を卒業して法科大学院既修コースへ進学することが可能になること、②学部から法科大学院への進学に際し、一般入試とは別に法曹コース修了者向けの特別入試を実施し、学部成績等を用いた総合的な判断により入学者を選抜できること、③法科大学院の修了に必要な履修科目の一部を学部生の時期に前倒しで履修し、これを法科大学院の修了要件単位として利用できること、です。

①と司法試験実施時期の変更(いわゆる「在学中受験」)により、学部入学から司法修習を終えて法曹になるまで8年弱を要していたものが、最短6年に短縮されます。これにより、法曹希望者の時間的・経済的負担の減少が期待できます。また、②により法科大学院進学の際の入試の受験負担が減少するほか、③により法科大学院における学修に余裕が生じると考えられるため、司法試験に向けた準備がしやすくなるといった利点が考えられます。

制度上、法曹コースの運営主体は学部ですが、法曹コースが上記①～③の特徴を享受するためには法科大学院と連携協定を締結する必要があります。そして法科大学院には、連携協定を締結しようとする大学に対して法曹コース編成に関して参考となる情報の提供その他の協力を行うことが求められています。また、連携協定を締結した大学に対しては、法曹コースにおける教育と法科大学院における教育との円滑な接続を図るための措置を講じることが求められています。

高等司法研究科では、現在、大阪大学法学部に協力して、同学部における法曹コース設置のためのカリキュラム作成に携わっております。



これにより、学部3年生春～夏学期までに主要7科目を履修できるようにするほか、演習科目の活用により実践的な学修への第一歩を円滑に踏み出せるよう工夫しています。また、大阪大学以外の大学との連携協定の締結についても、慎重に検討を進めています。

法曹養成制度、特に法科大学院制度にはとかく批判がありますが、法曹希望者がその希望を実現できるよう、制度の確立及び運営に努めてまいりたいと考えております。

(教務委員会委員長 久保 大作)

### 新たな取組み等について (入試関係)

#### グローバル選抜と特別選抜

新たな取組みとして昨年度から実施されているグローバル法曹特別選抜(募集人数5人程度)は、2019年度入試(2018年実施)の出願者数が11名、先日行われた2020年度入試の出願者が16名と、順調なスタートを切ることができました。高い語学力を活かしてグローバルに活躍する法曹を育成するという制度目的に合致する方からの出願が多数ありました。今年度は、本学外国語学部から法科大学院に進学し、弁護士として活躍している先輩に、外国語学部在学を対象とした講演の機会を設けるなど、グローバル法曹特別選抜がより充実したものとなるよう取組みを続けています。

また、適性試験の廃止にともない、昨年度から社会人特別選抜の面接方法を変更しました。やや長めの文章を読んだうえで、その内容に関する質問に答えるという形式で25分ほどの面接を行なっています。文章の内容を正確に理解する読解力、面接委員の質問に的確に答える論理的思考力・表現力が問われます。受験者に法律の知識が無いことを前提としつつ、法曹としての適性を測ることができており、多様なバックグラウンドをもった法曹を育成するという社会人特別選抜制度の目的に適った選抜ができていると感じています。

(アドミッション委員会委員長 松尾 健一)

## 2019年の司法試験の結果について

### 合格発表を受けて

9月10日に司法試験の合格発表があり、本研究科からは、46人が合格を果たしました。合格されたみなさんには、心からお祝いを申し上げますと同時に、さらに精進を重ね、法律実務家として社会に貢献されることを願います。他方、残念ながら合格に手が届かなかったみなさんには、今回の結果を反省し奮起されることを期待します。

今年度は、昨年度に比べ、合格者数は4人減少しましたが、これは主に受験者数の減少(21人減)によるものであり、合格率は対受験者で41.1%と昨年度より約3.5ポイント上昇しました。この合格率は、全国の法科大学院のなかで7位に当たります。また、法学未修者の合格率は全国の法科大学院のなかで3位となりました。他方で、修了直後の受験での合格率は46.2%であり、昨年度より約1ポイント下落しました。在学生のみなさんには、修了直後の最初の受験で合格できるよう、在学中に十分な実力をつけてほしいと思います。

(副研究科長 松井 和彦)



#### 金原 澄佳

2019年3月  
法学未修者コース修了

#### 『司法試験を振り返って』

私は未修で入学しました。学部での勉強が不十分で、周囲より遅れていると感じていたため、とにかく真面目に講義を受けました。講義の予習復習をこなすうちに、基礎的知識が身に付いたと思います。

そして、友人と勉強することで、1人では上手くできない答練に取り組むことができるとともに、何が自分に足りないのか知ることができました。試験が始まった時は、手が震えて字が書けませんでした。ダメかもしれないと思った時もありましたが、ここで諦めてたまるかと右手を動かし続けました。自分が合格したとなかなか信じられませんでした。祖父が合格を喜んでくれた時に、ようやく実感することができました。

試験を乗り越えることができたのは、熱心に指導してくださった先生方、支えてくれた両親、一緒に歩いてくれた友人のおかげです。本当にありがとうございました。



#### 矢野 竜二

2019年3月  
法学既修者コース修了

#### 『柔軟性が長期戦攻略の鍵』

私が司法試験において最も苦労したのは自分の性格との戦いであった。私は、自分に強い制限を課す性格であり、特に、大学4年時に受験した予備試験の短答試験(1点足りず不合格)前からロー入試にかけての時期に、勉強以外のことは何もしないという制限を加えていた。ゼミ以外で友人と会うこともなく、気晴らしもせずに勉強し続けた。

この道、結果が得られるまで長時間を有するため、自信という栄養を得ることもできず、結果的にかなり精神的に追い込まれていった。夜中、苦しくて眠ることもできなくなった。そうした失敗を踏まえて、ロー入学後は、制限的な性格を解放し、苦しくなる前に気分転換をするようにした。そうすることで、精神的に安定し、むしろ以前よりも勉強が捗るようになった。結果も出始め、強い自信も獲得した。司法試験を通じて、進むだけでなく、立ち止まることの大切さを学んだ。



#### 若林 直樹

2019年3月  
法学未修者コース修了

#### 『司法試験合格体験記』

私は、いわゆる純粋未修者です。そんな私が1回目の受験で合格することができたのは、3年間の勉強計画を立てていたこと、試験の分析を怠らなかつたこと、ロースクールの先生方、友人のサポートがあったこと、が大きな要因だと思います。

ロースクール入学から卒業までの2年、3年は、長いようで短い期間です。授業の予習や復習で忙しい日々も続きます。漫然と勉強することなく、司法試験合格に向けた計画を立てましょう。

純粋未修者は、どうしても最後尾からのスタートを強いられます。他の受験生と同じ勉強方法では、追いつけない部分も出てきます。幸い司法試験は、相対的評価がなされる試験です。司法試験問題を分析し、他の受験生が苦手とする分野に力を入れるなどすれば、3年間で後れを取り戻すことは、十分に可能です。

最後になりましたが、先生方、友人など色々支えてくださった方には、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。